

Walpola Rahula :

Le Compendium de la Super-doctrine (Philosophie) (Abhidharmasamuccaya) d' Asaṅga

吉 元 信 行

一

ここに紹介と批評を試みようとするのは、W・ラーフラ博士の近著、Abhidharmasamuccaya のフランス訳についてである。ラーフラ博士はスリランカ出身の佛教僧であるが、今日まで約三十年の永きにわたるフランス滞在とパリ大学での佛教研究という経歴をもつ。そして、Early Buddhism in Ceylon や四諦論に関する研究等、幅広い著作活動をもつ佛教学者として知られている。

今日まで数多くの佛典がフランス語に訳されており、特にド・ラ・ヴァレー・ブサンによる中論・俱舍論・成唯識論、ラモットによる撰大乘論・大智度論・維摩経等北伝佛典に対する訳業は高く評価されているものであるが、本書もまたそれらの業績に劣らない意義をもっていると思われる。

著者はスリランカ人であるが、この労作は、フランスにおける永い研究生活の結実であり、巻頭の謝辞にも述べられているように、多くのフランス東洋学者の協力によって成ったもので

ある。

内容の紹介に移る前に、本書の中ではあまり詳しく論じられていない『阿毘達磨集論』の原典について触れておかねばならぬ。

Abhidharmasamuccaya (以下 Samuccaya と略する) は無著 (Asaṅga) の著作で、思想的にはいうまでもなく瑜伽行派に属する。すなわち、弥勒 (Maitreya) に帰せられる『瑜伽師地論』の綱要書といった性格をもち、その瑜伽行派の思想を阿毘達磨の説相をもって説くという特異な論書である。

これは、漢訳では『大乘阿毘達磨集論』(大正・卷三一・No. 1605) として知られている。また別に、漢訳『大乘阿毘達磨雜集論』(以下、雜集論) (大正・卷三一・No. 1606) があって、唯識・法相の主要な論書の一つとして、中国や日本において古くから研究されてきた。この『雜集論』は、Samuccaya と獅子覺によるその註釈 Abhidharmasamuccayabhāṣya (以下 Bhāṣya) とを安慧 (Sthiramati) が合採して編集したものであり、そこには『集論』の全文が含まれている。

『集論』(Samuccaya) の梵本、諸訳を総称して以下集論と称する) の研究といっても、それはたいいてい唯識・法相宗の性格の強い註釈部分を含む支婁訳『雜集論』を通じて行われた宗学的研究にすぎず、本論そのものを直接に研究するということは近年までほとんど行われなかった。また、チベット訳大藏経の中に Samuccaya が Chos mñon pa kun las bris pa (影印北京版・卷一一二、No. 5550) として含まれていることは早くから知られて

いたが、梵本の刊行されるまでは殆んど顧られてはいない。

ところが、一九三四年、ラーフラサンクリトヤーヤナがチベットにおいて *Samuccaya* 原文の写本断簡および *Bhāṣya* のほとんど完全な写本を発見して、それらの写真を将来し、このことが学界に報告されて注目を引いた。この *Samuccaya* の断簡は、戦後になって、ゴーカーレーによって *Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, *Journal of the Bombay Branch, Royal Asiatic Society*, N. S. Vol. 23, 1947, pp. 13-38. (以下 G 本) として公表された。これは、梵文散逸部分について漢訳とチベット訳の相当箇所を明示しており、*Samuccaya* の原典研究には価値の高いものである。

続いて、ブラダン¹⁾は諸訳によってその散逸部分の還元を試み、現存の梵文と合わせて、Pradhan, P. (ed.): *Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, *Santiniketan: Visva-Bharati*, 1950. (以下 P 本) として発表した。P 本によって我々は一応 *Samuccaya* の原典形態の全貌を伺い得るわけであるが、そこには種々の問題点が残されている。すなわち――

(1) 未刊の *Bhāṣya* が参照されているが、*Samuccaya* と *Bhāṣya* との本文の間にはいくぶんの相異があり、その取捨が必ずしも常に適切になされているとはいえない。

(2) 梵文と藏漢訳との間かなりの異同があり、訳文には付加や省略が認められるから、原文の散逸部分をただ藏・漢訳によって完全に再構成することは不可能である。

(3) 梵文の現存する部分と散逸していて還元を試みられた部分

との別がはっきり示されていない。

(4) 還元部分²⁾が、*Bhāṣya*・漢訳・チベット訳のいずれによってなされたかも明示されていない。

(5) 今まで評者が対照し得た限りでは、ブラダンはむしろ漢訳の方を重視しているように見受けられるが、それは適当であろうか。漢訳には付加・省略・意訳が多く、チベット訳の方が原典の形態に近いことは明かである。

もっとも、ブラダンは自らの作業を還元 (restoration) と呼ばず、retranslation という表現を用いている。散逸部分について、原典形態を元どおりに再構成することは不可能に近いが、藏漢訳から梵語に再訳することは可能であるし、そうした再訳で散逸部分を補うことは意味があるとするのがその意趣であろうから、そこには訳者の謙抑がある。いずれにしても *Samuccaya* を原典として読もうとする場合には、P 本よりむしろ G 本を底本として、梵文散逸部分はチベット訳を重視して、P 本の還元は参照にとどめるという行き方を採るべきであろう。

本書では、序論第三節において、簡単に原典についての解説をなし、この翻訳はそれら諸本に基いたことを述べているだけで、右に言及した様な原典批判についてはまったくふれていない。そして、諸本の中のどれを底本にしたかも明記されていない。ところが、その訳文と諸本を対照してみると、著者独自の立場で資料を取扱っていることがわかり、その訳文の上に著者の原典批判を見ることができる。しかし、梵文に散逸部分がある以上、その部分については殊に資料の取捨やその根拠を何ら

かの形ではつきりと指摘して欲しかった。

二

本書の構成は次の様になっている。

謝辞	p. XII
序論	p. XI
本文訳註	p. I
略号	p. 187
語彙	p. 189
梵・仏	p. 203
仏・梵	p. 217
索引	p. 217

序論では、まず第一節に瑜伽行派の開祖である無著の伝記について論究する。無著の伝記についての主要な資料は真諦の『婆藪槃豆法師伝』であり、それ以外のものとしては、玄奘の『大唐西域記』巻五に、無著が世親を大乘に改宗せしめたとの挿話があるくらいである。著者はその脚註で、他に無著の伝記として、慧英の『大方広佛華嚴經感応伝』（大正・巻五一、No. 2074）をあげている（p. IX）が、それは記述もきわめて簡略であり、『西域記』の要約にすぎないものと思われる。

ここでは、それらの資料を用いて、他の学者の説をも参照しながら、著者なりの無著伝を詳しく記述している（pp. IX～X）。その中で、無著の当初の所属部派を『婆藪槃豆法師伝』では有部とし、『西域記』では化地部としている矛盾について、有部の伝承によれば化地部は有部の一派とされるのであるから矛盾

でないとしている（p. X）。

次に、無著と弥勒との関係について興味深い論究がある（p. XI）。無著が弥勒菩薩に伴われて兜率天に昇り、そこで瑜伽師地論やその他の大乘の教えを受けたことは、漢訳伝のみならずチベット伝も伝えるところである。しかし、この弥勒を歴史上の人物と認めるかどうかについては学者の見解は必ずしも一致してはいない。本書では、はっきりと弥勒・無著同人説をとり、弥勒に帰せられたあらゆる論書をすべて無著の著作の中を含めて列挙している。そして、弥勒を歴史上の人物とするようなことは宗教心理学上の一般的傾向であるから根拠にとぼしいことを指摘し、弥勒が歴史上の人物であることを否定して、弥勒・無著別人説を批判している（p. XII）。

しかし、そうは言っても、それらの論書の内容を見ると、弥勒に帰せられた論書であって、無著の著作の中で自説の典拠として引用されたものは、疑いもなく無著以前に存在したことになるし、思想的に見ても両者のそれぞれに帰せられた論書相互の間には種々相異点が認められる。勿論、これだけをもってただちに弥勒を歴史上の人物とするわけにはいかない。弥勒に帰せられている諸論は多様な内容をもっており、おそらくすべてがただ一人の作ではなく、ある程度の歴史的経過の間に、複数の著者の手によって成立したものでなかろうか。そしてこれらの論は、瑜伽行派の学説ないし大乘の教義を権威づけるために将来佛たる弥勒菩薩に仮託したのではなかろうかとする説が我国の学界では有力である。

次に世親のことにふれ (p. XI-XIII)、それに関連して、東西の諸学者の論考を参照しつつ、無著が西北インドにて紀元四世紀に活躍した論師であることを確信をもって結論づけている (p. XIII)。そしてその頃は佛教の諸学派が阿毘達磨という形で自派の正統性を理論づけたように、大乘の瑜伽行派(唯識学派)でもその体系を阿毘達磨としてまとめた、それが『瑜伽師地論』であるとする。その『瑜伽師地論』の綱要書性格を持つのがこの『集論』であるから、ここに佛教における『集論』の位置づけを知ることができる。

第二節は『集論』の内容についての紹介である。先ず、この論は無著の他の論書の綱要書性格をもつ重要な論書であることを指摘し、内容は大別して、本事分・決択分の二品になることを述べる。Sannuceya が断片でしか現存しない以上、その章分けがいかななされていたかは確認し得ない。ところが漢訳とチベット訳ではその章分けのしかたが相異している。それを

漢訳

チベット訳

I 本事分					II 決択分				
(4)	(3)	(2)	(1)		(8)	(7)	(6)	(5)	
成就品	相应品	摄品	三法品		論議品	得品	法品	諦品	
				①					②
				本事集					諦決択
									説法
									得決択
									論議
									④
									⑤

図示すれば上の様になる。

この様に、漢訳では八品に分かれるが、チベット訳では漢訳の本事分の四品に相当する部分を第一章とし、決択分の各品を二章以下として計五章よりなっている。ところが、同じチベット訳巻頭のウダーナでは漢訳と同じ八品の分け方をしている (p. 112, p. 236) など未だに不明な点が多い。本書では漢訳の章分けをそのまま踏襲している。

次に、八品の一についてその要旨を述べている。P本でも Summary of the Book として、集論の内容についての論及がある (P本, pp. 23-33) が、それは批評的立場でなされており、簡明な内容紹介としては本書のフランス語による要旨の方がすぐれている。各品の内容をさらに細かく分けて、丁度佛典における科文の様な形式をとって論旨を要約しており、わかりやすく有益である。

三

本書の主要部分は『集論』のフランス語訳であり、その訳文は平易である。先にも述べた如く、P本では梵文現存部分と還元部分がはっきり示されておらず不便であったが、本書で現存部分の訳文にそれぞれ符号をつけてわかるようにしたのは大きな進展である。この部分の訳文は明快で、あまり疑問とすべき点は少ないが、散失した還元部分については種々問題点が認められる。以下、気のついたところを紙面の許す範囲で論及しよう。

先ず、本論の冒頭の偈であるが、漢訳では次の様に説かれ、P本ではその下のように還元されている。

幾何因取相 建立与次第 kati kasmād upādānaṁ vyava-

sthānaṁ ca lakṣaṇam/

義喻広分別 集総頌応知 anukramārtha-dīṣṭāntabhedā

jñeyāḥ samuccaye//

(大正・三一・六六三a)

(A本 p. 1)

この中の「何因取」に当るところを本書では dans quel but (何のために) と訳し、その原語を kim upādāya と推定して P本の還元をやや改めつつある (p. 1, l. 13-14)。しかし、チベット訳では ci phyir der len (kasmād upādānaṁ) (Tib. 112, p. 238-4) とあり、その後の長行相当部では「何因」と「取」を、チベット訳では cihi phir u ne bar len pa を分けて訳している。前後の内容からしても当然この Pourquoi (kasmād), saisie (upādānaṁ) と訳すべきであろう。

受蘊の定義の箇所 (p. 5) は、漢訳とチベット訳の一致しないところであるが、本書の訳は P本における還元梵文とも一致せず、どちらかといえば漢訳に近いようである。

漢訳重視の傾向は梵文現存部の訳文中にも見られる。例えば Sa fonction consiste à diriger l'esprit dans le domaine des activités favorables (kuśāla), défavorables (akuśāla), ou neutres (avyākṛta). (p. 7, l. 27-29) という文中の dans le domaine des activités に相当する句は梵本・チベット訳ともに存しないが、漢訳「於善・不善・無記品中役心為業」(大正・

三一・六六四a) における「於…品中」を訳したのである。

また、欲の定義のところ、Sa fonction consiste à donner une base à l'énergie (p. 7, l. 38) に相当する文は、P本では vīryādāna-saṁśīrayādāna-kamakaḥ (p. 6) とあり、G本では vīryādāna に相当する句は vīryārambha となっており、漢訳では「正勤所依為業」(大正・三一・六六四a) と訳される。この部分はチベット訳では rtson 'byugus rtom pa'i rten とあるところから、G本の vīryārambha (発動) の方が正しいと思われる。ところが、本書の l'énergie は卷末の語彙を見てもわかるように vīrya の訳であるから、ādāna, ārambha, rtson pa のいずれも訳していないことになる。むしろ漢訳「正勤」の訳であろうが、正勤は修業としての意味を持つから l'énergie (気力) は適訳とは思われまい。やはり ārambha (起すこと) という意味を含めて訳すべきであろう。

次に、諂 (sāthyā) の定義のところ、C'est [la tendance à] cacher ses fautes réelles... (p. 12, l. 26-27) (かの実なる過失を隠す「傾向にある」ことである) と訳する原文は P本・G本ともに bhūta-dosa-vimāṇā とある。この中の vimāṇā なる語は手許にある辞書には見出し得ない。この部分は漢訳では「矯設方便隱実罪過」(大正・三一・六六五a) とあるから、本書の訳は漢訳に従ったのであろう。ところがチベット訳では Res pa yan dag par skyon ba (過失を真実であると弁護する) (Tib. 112, p. 239-4) には skyo ba とあるが、註釈に skon ba とあるにやう修正) となっており、その註釈では「あることを他のことに

転化する (bsgyur ba)」(Tib. 113, p. 87-4)と解釈されている。skyon ba は Skt. pālāṇa (護) の訳であるから、チベット訳者は vimalāṇā を vipālāṇā と読んだのかも知れない。「実なる過失を隠す」とする本書の訳はむしろ他の心所である覆 (mrakṣa) の定義に近い。諂はただ隠すのではなく、矯って方便を設けて、過失を真実であると弁護することである。いずれにせよ vimalāṇā とはその様な意味であろう。

これまで指摘したところは主として漢訳を重視したと思われるところである。また、チベット訳によったと思われるところもあるが、ここでは紙面の都合でふれられない。この様なところから、本書の訳文は、はっきりとある一本を底本としたのではなく、諸本を対照しつつ、著者の判断によって随時適当な本によって訳が与えられているようである。そして梵文現存部分以外は漢訳重視の傾向が著しいようである。このことは本書の長所ともまた短所ともなっている。短所とは、底本をはっきりさせなかったため、テキストとしての厳密性に欠けることである。本書の訳文には底本の頁が記されていないので原典との対照に不便である。このことを、巻末の労作、語彙や索引の厳密さと比べるといささか片手落ちの観がある。

巻末の語彙 (pp. 189-216) は、梵仏と仏梵の辞書になっている。これを見るとあるサンスクリットをいかなるフランス語で訳したか、又、あるフランス語訳の原語が何であったかということが一目瞭然にわかるのである。我々が原典の翻訳をする場合に先ず途迷うことは、漢訳佛教用語の使い方である。漢訳用

語をそのまま使うためにかえってわかりにくくなるということ度は度々経験することである。ところが、佛教用語を現代語に訳してしまふと訳語が統一されていないためそれが何の訳語であるか理解するに困ることがある。本書ではこの語彙の欄を設けることによって、そのことを見事に解決している。

例えば、vyavasthāna を漢訳で「建立」と訳すため、我々はしばしばそのまま「建立」とするか「安立」と訳してそのまま安心してしまふ。これを本書では definition (定義) と訳しているが、この方がよくわかるのである。

また、「惱」(hradaśa) という心所の定義は、「悩み」という国語のイメージとはずいぶん異なっている。Saṃuccaya では「惱」を次の様に定義している。

「惱とはいかなるものか。瞋に属するものであって、忿と恨を先行とする心の被害である。高い、過度の、荒々しい声に所依を与えるを作用とし、非福を産み出すを作用とし、また不安隠にあることを作用とする。」(P本, p. 8)

ここにおける「惱」はいわゆる「なやみ」でなく、他に對する惡意というような積極的な意味をもつ。それを本書では適切に malice (惡意) と訳している (p. 19)。

訳語のいちいちを当てみると種々問題点があり、納得できない訳も多々あるが、これらの試みは画期的であり、我々にとっても原典翻訳に當って学ぶべき点が多い。それにもまして、この語彙は、梵仏及び仏梵の小辞典にもなり得るという点で便利である。最後の索引も、本書に出る殆んどの原語と固有名詞

を網羅しており有益である。

四

以上、本書の叙述と問題点について略記した。種々の問題点が認められるとは言え、このことは決して本書の価値を下げるものではない。本書のタイトルは「無著の哲学綱要」とでも訳されようか。すなわち本書は大乗佛教の哲学綱要である。そのような『集論』の思想的・原典的価値が改めて見直されてきた今日、本書はその代表的研究書であり、また原典からの唯一の翻訳書である。他に類書のない現今において本書の刊行は高く評価されて良いであろう。少なくともインドの佛教を学ばんとする者は必ず座右に置くべき書物であると考ええる。

(19×28cm: XXII + 238 p., École française d'Extrême-Orient, Paris, 1971)

賛助会員募集

次の要項で賛助会員を募集いたします。

○会費 年間九百五十円(二冊分)

二年間分 千八百円

*特等号のときは特別会費を頂きます。

○申込み 京都市北区小山上総町

大谷大学佛教学研究室

佛教学セミナー編集部

*郵便振替用紙も御利用下さい。

(京都「仁」) 大谷大学佛教学

研究室 代表者 舟橋一哉

既発行の「佛教学セミナー」を

御希望の方も右記のところへお

申込み下さい。

第一号 絶版

第二号 絶版

第三号 絶版

第五号 絶版

第七号 絶版

第四号、第六号、第八号より第

十七号までの内、二冊以上お申

込みの方は送料を研究室で、負

担いたします。(第六号まで各

冊二〇〇円、第七号より第十号

まで各冊二五〇円、第十一号よ

り第十四号まで各冊三〇〇円、

第十五号より第十七号まで各冊

三五〇円)